

メールレター (11)

「あけましておめでとう」と日本語で娘から、「ボナネー(正確にはボンヌアンネ(Bonne année)ですが続けて発音するのでボナネーと聞こえてきます。発音なんてかまっていられませんが聞こえる通りに挨拶を返します。)」とフランス語で義理の息子や孫たちから、「ハッピーニューイヤー」と娘の英語系のボーイフレンドから、12月31日の真夜中から1月1日に変わる瞬間に新年を祝い、電話が鳴り響きます。色々の言葉でお祝いの言葉が伝わってきます。さあー、シャンペンをポーンと抜きましょう。近くの人とハグをして新年のお祝いです。我が家の場合は、老夫婦のみです。ハグも、いささか、すりきれてきました。おととと、レンタル猫のメルランもいます。カリブ海のマルチニク島で年末年始のバカンスを家族で過ごしている義理の次男は体良く、「和子が退屈しないように僕の猫貸してあげる」ともっともらしくチャーミングな微笑みを浮かべて置いていった猫も側にいました。

モントリオールの新年は、寒波の襲来を受け、マイナス26度の凍てつく年明けとなりました。目の前の港には、夜空にカラフルにライトアップされた大きな観覧車が、一晩中ゆっくりと回っています。それを背景に、この寒さの中でロックコンサートが行われ、大きな歌声というか叫び声のようなものが聞こえてきます。

クリスマスは家族で祝いますが、大晦日から新年は友人と祝うのが欧米の一般的な習慣です。娘はボーイフレンドや独身の友達と10人で集まり、焼肉パーティで年越しです。次男はお日様いっぱいのカリブ海で独身貴族の従兄弟や家族と、義理の長男は、この時間には、妻も子も鼻ちょうちんの高いびきで寝入り、手術後間もない、まだ痛い肩を摩りながら細々と1人で密やかに年越しのようです。

除夜の鐘や初詣の様子を日本のテレビで見ながら、ドリトル先生の深いため息がもれるのでした。

「日本には誰にも小さな心がけがあるんだねえ。幸せや平和や健康を祈って手を合わせに行く、この気持ちが大事なんだ。さりげない精神性だろうねえ。こんな騒がしいロックで騒いでこの国は終わりなんだ。教会の扉さえ開くこともなく、司祭たちは暖房でぬくぬくの部屋で年越しで、鐘もならない。何かを忘れてしまったようだ。」

愚痴るドリトル先生の背の向こうから、12時ぴったりに、凍てついた夜空に次々に色とりどりの花火が上がり、白く凍った港に落ちていきます。ガラス戸の向こうに繰り広げられる花火の饗宴です。あれあれ、対岸からも花火が上がります。対岸の島からはレーザー光線が飛び交います。

「わー綺麗!!」

「シャンペンで乾杯！」

回れ回れ、観覧車。完全に花火の風景にはまっています。明後日が満月のお月様も、ニコニコ顔で港を照らしています。原住民のインディアンには、満月の3日前から寒波が来るといふ言い伝えがあるそうですが、まさにその真っ只中、風を受ければ軽く体感温度はマイナス35

度を超えます。それでも楽しく新年のお祝いです。対岸の島に向かう道路には車が数珠つなぎです。車の中で花火を見ようとやってきているのですが、法律上、道路で車を止めてはいけないため、カタツムリも顔負けのスピードでノロノロと花火を見ながら進んでいきます。

元日は、義理の長男の所で、お嫁さんの両親や兄弟家族など親戚が集まることになっています。お料理の持ち寄りということで、私はお寿司を持って行くことにしました。

「それだけじゃなくて、デザートも持って来て。おばあちゃんの時代のようにデザートテーブルを華やかにしたいの。」

ドリトル先生は

「魚をさばいてお寿司を作るのがどんなに大変かわかっていないみたいだね。お寿司と野菜のディップやハムの盛り合わせの一皿料理といっしょくたにして、そう言ってるのだろう。何てことだ。だから、もっとなんて言えるんだろうね。デザートくらい、したければ自分で2~3個作ればいいじゃないか。」

「年明けから怒らない、怒らない。北アメリカの女性は、態度はでっかく、やることは小ちゃくだから。適当に手を抜くから大丈夫よ。」

かくして、マダム寿司は、腕まくりをして元日早朝から働き、東奔西走することになったのでした。